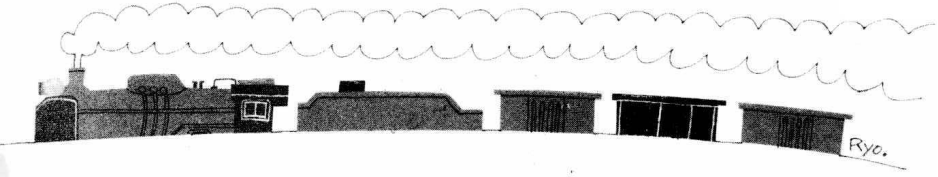
D51585

遠い汽笛

—トイレット部長奮戦す—



藤島　茂

文藝春秋

遠い汽笛

著者略歴

昭和16年東大建築科卒業と同時に鉄道省に入省。戦後国鉄本社建築課課長補佐，フランス留学，技師長室調査役，大分鉄道管理局長などを経て42年外務部長就任。44年2月国鉄を退職し，国際観光振興会理事となり今日に到る。工学博士。著書「トイレット部長」（文藝春秋刊）

昭和四十四年十二月二十日　第一刷

定価　四八〇円

著者　藤島茂

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五―一二一一
郵便番号　一〇二

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

© 1969 Shigeru Fujishima　Printed in Japan

目

次

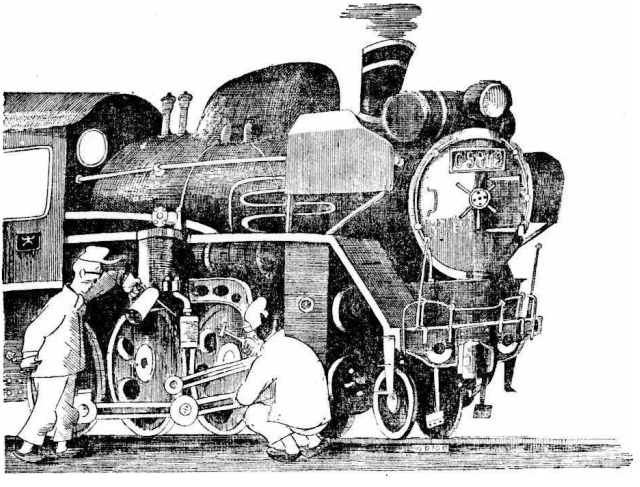
遠い汽笛 5
白い手袋 23
ただいま定時 133
お召し列車物語 135
超特急「ヒカーリ」 163
ああ新婚列車 175
同伴寝台はいけません 183
蒸気機関車のロマン 191

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

薩摩守たち 199
鉄道スラング考 207
怪談——足入りの靴 221
美しい列車秘書 241
押し屋さん 247
夜の汽笛 257
あとがき 275

装幀 柳原良平
カット 六浦光雄
大分鉄道管理局編「沿線風景」より転載

遠い汽笛



トイレット部長始末記

その日、かえって鞄をおくなり、
「おい、国鉄をやめるぜ」
というと、家内は、
「エッ、ほんと？」
と息をのんだ。
「長い間ご苦労さま」
こう言ったのはしばらくおいてからだった。
国鉄が好きで入って二十七年、長いといえば長いし、短いといえば短い。乗っていた汽車がガタンととまって、窓の外の景色がうごかなくなった。——そんな感じである。
どやどやと来た新聞記者諸君がお世辞まじりに、

「あんたまだ早いじゃないですか」
という。
「そんなことはないさ。もう五十二だもの」
「何年生まれですか」
「大正六年だよ」
「待ってくださいよ。六年というと、あんたまだ五十一じゃありませんか」
「あッ、そうか。一年はやかったか」
「なあんだ。本人がまちがえてるんじゃしようがない」
さてやめるとなると、しなければならないことがたくさんある。身のまわりの整理もしなければならない。挨拶にもまわらなければならない。
しかし私は、なにもかもほっといて、まず東京駅から新幹線に乗った。大阪往復よりヒマがない。それでもまず列車に乗りたかった。
「今生の見おさめ」などというと大げさなことを、と思われるかも知れないが、鉄道屋が鉄道屋であるあいだにこれだけはしておきたかった。矢もタテもたまらぬ、といったところだ。
ちょうど二年前、地方の鉄道管理局長をやめて本社の外務部長になったときのことを思い出す。鉄道の現場というものにはふしぎな魅力がある。これはやはり、鉄道が土地にひっついて、切れ目なく連続しているからなのだろう。だからまた、そこで共にはたらく人間をもしっかり結び

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つける。

いよいよ現場をはなれる日、私は上り特急『富士』の最後部の車掌室で、列車が管内のはずれを出るまで立ちつくした。すすめられても座席へもどる気になれなかった。

通り過ぎる各駅には、それを知って駅や保線の連中が、折からの小雨のなかを立って見送ってくれた。特急だから手をふる姿はたちまち小さく見えなくなる。私の姿も見えなかったろう。

「しっかりやれよ」

心の中でそう私はさけびつづけた。

さいごの新幹線に乗った日も小雨だった。列車はよく走った。私は座席をたおして目をつぶったまま、二年まえ現場を去った日のことを思い出していた。こんどこそ国鉄を去る日がきたのだ。

自分に向いた次の仕事があるなんてのはしあわせだとはいうものの、やはり定年退職というのはサラリーマンにとってつらいことだ。

「トン、トン」

と戸を叩かれても、ふつうなら、

「入ってます！」

と言えばいくら催促されたって知ったことじゃないが、サラリーマンは戸を叩かれたら、あわてて身仕度をととのえて出てこなければならない。

定年いっぱい五十五までいたってみんなやりかけではないか。途中でトイレから出てきたよう

にみんな冴えない顔つきをしているのもムリはない。心ゆくまでとはいわないが、せめてひと区切りつくまで落着いて出るだけ出させてもらいたいものである。

「だけど、あんたみたいに勝手なことをやっていた人を、よく国鉄はいままでおいてくれたわね。とうとうトイレット部長になれなかったのは残念だけど」

と家内はいう。

私もそう思うけれど、官制上そういう部はないのだからしかたがない。

家内がこう言って残念がるにはワケがある。ある晩、つとめからかえってから、ふと思い立って書斎にこもり、原稿をかきはじめた。まだ本社の建築課にいたころである。

もともと技術屋だから、設計図こそはかいても、まとまったものなぞかいたことはない。それがどうして突然あんなものをかきはじめたか、私にもわからない。

あとになって、「どうして便所のハナシなんかかいたんですか、動機は」などきかれてもっともらしいことを言ったりするが、正直なところ動機もなにもないのだ。

もちろん好きで駅の設計をやっていたから、駅へ行けば駅長に「なんとかしてくださいヨ」とコボされ、建築の作業員の苦労話もきいていた。同情もしていたし、憤慨もした。けれども、それを世に訴えたいあまり筆をとった、と言えばウソになる。ほんとのところは、いつとはなしにこういうハナシがたまって、急に書斎へかけ込んだ。つまり、もよおしたのである。

それから四晩のあいだ、かえっては書きつづけ、かなりの分量になった。せいせいした。

このさいここのところはハッキリ書いておきたいのだが、忠実なる国鉄職員であったところの私は、翌朝それをしかるべき所管の局へもって行って、「こういうものをまとめてみましたから、つかってください」とさし出した。

局長は手にとってパラパラとめくってみただけで、

「こんなもの、こう長くちゃつかいものにならんヨ。一、二枚ならまたべつだがネ」

とつっ返してよこした。

「短けりゃどこかの新聞がつかってくれるかも知れん。担当の係へもって行きたまえ」

私はがっかりした。係のところへもって行くくらいなら、はじめっから入りにくい局長室のドアなどノックしない。つかってくれなくてもいい。読んでほしかった。

下役のきもちというものはそういうものである。みんな好きでつとめている以上、自分なりにこうしたらきっとよくなる、という考えやプランがある。しかも、これはゼヒあの人にきいてもらいたい、ということがあるものだ。採用されるかどうかは別問題、じかに見てくれ、きいてほしい。それでもう満足なのだ。

大企業で組織が大きくなるとどこでもそうだと思う。ついでだから、もうすこし一般論を言わせてもらおう。

あの人にこれをきいてもらいたい、そう思っている下役は、たった一度でもこれと思う上役に紋切型であしらわれると、二度とふたたびいい知恵があっても出そうとしなくなる。腹を立てる

というよりも、身のほど知らずのわが身がなさけなく恥かしくなる。サラリーマンとはそういうものだ。

だから悧口な奴なら、はじめっから知恵など出さない。企業にとってこんな損失はなかろう。

経営学の本に、上役はどんな忙しいときでも、かえってノンキな顔をしていなければならない、というのがある。そうしていないと、そばへ寄っただけでハネとばされそうな気がして、大事なときにいい知恵をもった部下が敬遠してしまうからだとある。その通りだ。

さっきの私の場合なんかは、たかが思い立ってかいたリポートだし、国鉄を左右するような大問題でもないから、がっかりしただけだ。ともかく読んでもらいたかった。それを文藝春秋がひろってくれた。

一文の趣旨は、国鉄のお客さんの生態と駅の便所の実態といったようなことなのだが、国鉄はおそらくわが国でもっとも便所をたくさんもっている企業だろうから、これを専門にやる部ぐらいあってもよかろうと思って、

「オレは駅便部長になるがいいか」

と言ったら、家内は一瞬かんがえて、

「そうねえ、トイレット部長ならいいわ」

と答えた。それがそもそも題名の由来なのである。だから彼女は、私がついにその部長になれなかったことを残念がるのである。

もっともこれは本の題名で、はじめ文藝春秋誌上にのせたときのタイトルは、

「臭くも長い物語」

というのである。臭いことははなしの性質上当然のことであるが、わざわざ「長い」と断わったところに、「短けりゃともかく」と言われたことに対する私のささやかな抵抗があらわれている。

それからはたいへんだった。

投書がたくさんくるのは、これはものがものだけにハネッ返りがあってもしかたがないが、お客さんのおおいのには閉口した。

たいていは防臭剤の売込みで、これが建築課で仕事をしている私の机のところへ現物をもち込んで大声で説明をはじめる。あげくのはては、防臭剤をシュッ、シュウーッとまいてみせる。

私はしかたがないとして、私のまわりのものは臭くもなんともないのだから、さぞかし迷惑だったろうと思う。

迷惑といえば私のこどもたちも被害者だった。そのころまだ中学生と小学生だったが、

「おい、おめえのおやじはトイレット社長だってナ」

といわれたり、次男は学校で「トイレット小僧」とよばれていたらしい。

私は私でつぎからつぎに便所の珍考案をもち込まれて往生した。実物模型を国鉄本社へもってこられては困るのである。こういう人は実に熱心で、机のわきへおいて自分でしゃがんでみせた

りするから、私は部下の手前あわてざるをえない。女子職員だっているのである。
「まあまあ、お立ちになって」
相手はしゃがんだまま、いや、これがですネ、こうしますと……。
そうかと思うと仕事中に電話がかかってくる。
「モシモシ、〇〇新聞の社会部ですがね」
「ハァ」
「いま赤羽駅で痴漢がつかまりました。先生のご感想は?」
そんなこといわれたって困る。痴漢がつかまったからといって、べつに感想はない。
それからまもなく、技師長室の調査役になったが、この調査役という職名がいけない。本のなかで、男子の小便は三十一秒九、女性の最短記録は一〇秒フラットなどと書いたので、まるで私はストップ・ウオッチ片手に調査ばかりしているようなイメージを与える。
なかにはひどくまじめな人がいて、
「あのう、御研究はたいへんなものでございますが、やっぱりああいう本をお書きになりますにはよく下調べをなさるのでございましょうね」
などとおっしゃる。
「ハァ、そりゃもう下調べをいたしまして……」
と答えてハッとしたりする。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com